

10. 総括

1. 窯の分布と変遷

今回の分布調査の結果、東昭吾氏の発見に加えて10地点程度を加えることができ、総数150地点を窯跡としてカウントすることができた。もちろん地表面の観察と遺物散布による推定のため、正確な窯の基数を示すものではなく、2地点としたものが同じ一つの窯に由来する灰原の可能性もあり、また1地点としたものが2基並存する窯である可能性もある。こうした不確かな点はあるものの、夜久野末窯跡群の規模を考える場合に150基という窯体の数が一応の目安になると考える。ただし、今回の調査においては、高内親谷4号窯、8号窯、日ノ本北11号窯など、東氏の活動以前に確認され、遺跡地図に示されてきた地点においてまったく遺物が採取できず、誤認、あるいは錯綜が疑われる事例が10地点ほどあり、窯跡の総数としては140基前後が一応の目安になる。また、鎌谷7号窯、日置1号窯、日ノ本南6号窯、畑ヶ谷12号窯、ナゲ5号窯、6号窯など、すでに窯体、灰原が失われたと考えられる例もあり、現存する数としては、130基程度であると見積もることができる。

窯の時期的な推移についても、これまでの研究を再確認するにとどまっている。7世紀前半に遡る関垣7号窯や4号窯など、牧川北岸に最初の窯が出現し、北岸地区の鎌谷支群、そして南岸西部のトウデン支群で7世紀後半から窯が営まれ、8世紀前半からは分布が一気に広がり、8世紀中頃から後半にかけて夜久野末窯跡群の最盛期を迎える。その後、急速に衰退し、牧川南岸の東部地域を中心に9世紀前葉まで生産が続いたのちにいったん廃絶する。200年近い空白ののち、南岸の大町田支群で9世紀末から10世紀初めに須恵器生産がおこなわれ、北岸でも同時期の小規模な生産が高内鎌谷遺跡東灰原の出土資料からうかがえる。

夜久野末窯跡群は、民家の迫る牧川北岸地区を除くと、後世の開発等を蒙った部分がきわめて少ないという特徴があり、分布調査から明らかになる窯跡群の消長は、そのまま実態を反映している可能性が高い。調査が進んでも、あまり消長に変更が見られないことから考えても、今後の発見によってこの変遷観が大きく揺らぐことはないと判断できる。

2. 工房と拠点集落

夜久野末窯跡群の中では、窯の立地に不適な尾根上に遺物が散布する状況がしばしばみられる。最も典型的なのが末親谷支群の散布地で、なだらかな尾根の上面で須恵器が採取でき、周辺の窯とも時期差がないことから、工房もしくは作業場を想定することができる。窯跡が密集して分布する末親谷支群の中でもその中心と言える場所であり、ここを起点に周囲の窯へのアクセスが考えられる。同様の散布地はナゲ支群でも確認されており、ここでもゆるやかな尾根上に立地している。谷に面する平地が狭小であるため、こうした尾根が工房や作業場として利用されたと考えられる。

採集土器の胎土と窯跡周辺の地質の検討からは、牧川北岸と南岸で大きな違いがあることがあきらかになっている（本書Ⅲ部9章参照）。粘土採掘場などは、分布調査で明らかにすることはできないが、少なくとも、北と南では別の土を用いていたと考えられ、工房や作業場も別々に存在したと推測できる。末親谷支群の散布地で想定した工房では、その周辺に土取場を設け、はんれい岩の風化した粘土を材料に製品を作っていたと言えそうである。

上述した窯に近接した工房・作業場の空間は、多くの人の居住に適した面積はもたないため、製品の出荷拠点といった施設は別に考える必要がある。その候補になるのが、牧川北岸に位置する高内親谷遺跡で、古代の交通路がこの牧川に沿ってあったと考えられることから、交通路への接続という観点で重要な立地であると言える。高内鎌谷遺跡では、その西端と東端で窯に由来する8世紀前半の灰原が発見されているほか、建物跡など集落の存在が明らかになっている。竪穴建物は7世紀前半に位置づけられ、この地域での生産の開始期に相当する。その後は8世紀代の遺物の出土は多いものの、灰原以外の遺構は不明であり、建物跡は12世紀以降に降ることが示されている。ただし、8世紀代の遺物の多さから判断して、同時期の建物等が未調査区に存在する可能性もあろう。高内鎌谷遺跡は鎌谷支群の膝元にある工房・作業場というだけでなく、夜久野末窯跡群全体へのアクセスも考慮すると、この場所を含む高内の集落周辺に生産の拠点があった可能性が導かれる。

3. 夜久野末窯跡群の開窯と後期古墳

これまでの分布調査の成果から明らかになっている夜久野末窯跡群の最古の窯は、関垣7号窯と4号窯で、7世紀第2四半期に位置づけられる。一方、すでに消滅した窯である鎌谷7号窯については「6世紀末」とする記述もあり、上述した窯に先行する可能性もある。高内の集落に近い鎌谷支群では、ほかにも消滅した窯を折り込む必要があるので、一応、7世紀前半を窯跡群の開窯の時期とみておくことが妥当であろう。このように考えると高内鎌谷遺跡で7世紀前半の竪穴建物が発見されていることも、この夜久野末窯跡群の開窯時に関わるものとして理解できる。

この夜久野末窯跡群と近くに所在する後期古墳はどのような関係になるのであろうか。高内鎌谷遺跡から至近にある長者森古墳からは6世紀後半の須恵器が出土しているが、初葬のものは青みの強い青灰色の色調をしており、明らかに夜久野末窯跡群の須恵器とは異なる。この時期の窯がないことも符合する。一方、7世紀前半に位置づけられる太田森2号墳の出土須恵器は、灰白色の色調で、同時期の夜久野末窯跡群のものとも似た色合いである。金属器に由来する椀形の器形が太田森古墳群にみとめられたが、同じ形ではないものの関垣7号窯の製品に金属器を志向する椀があり、共通性として捉えられる。こうした点から、太田森2号墳の段階では、まだ窯の特定には至らないが、開窯間もない夜久野末窯跡群から須恵器が供給された可能性は高いと判断する。こうした供給関係は、地域の有力者の推移を示す古墳の動向と夜久野末窯跡群の成立とが密接な関係にあることを示している。

Ⅱ部10章でみたように、夜久野の後期古墳の成立は、新たな交通路の開拓が関係していたと考えられ、丹波から但馬へと抜けるルート上の要衝であることが重要な意味をもつ。このルートに沿って



図1 朝来市和田山町岡田古墳群と岡田窯跡群 (25000分1地形図「八鹿」直見)を5%縮小)

夜久野から西に峠を越えた朝来市域では、和田山町東河地区に長塚古墳や小丸山古墳といった前方後円墳が6世紀初めごろに成立し、岡田古墳群として首長墳の展開がみられる(田畑2004)。この東河地区では、首長墳が営まれただけでなく、6世紀後半に推定されている岡田窯跡群も所在し、夜久野末窯跡群に先行する須恵器生産が確認できる。首長墳や窯業生産の双方で、夜久野に先んじる点が注目に値する。夜久野末窯跡群の成立を考える上では、同じ天田郡内の賀茂野窯跡も注意されるが、より距離的に近く、また夜久野末窯跡群の開窯直前の時期にあたることから、東河地区にある岡田窯跡群が重要な位置を占めていると言える。このような国境を挟んで、時期的には継続する現象についても検討に値すると言え、これらの関係も夜久野を通る東西のルートの重要性を物語っている。

畿内から丹波、但馬に達するルートとの関わりで注意されるのが、長者森古墳のある高内の東となり、日置の地名である。日置は「へき」と呼んでいて、夜久野末窯跡群の初期の窯跡のある関垣支群が属するが、この日置の地名は古代の日置部や伴造氏族の日置氏に由来し、後期古墳の成立とも深い関係をもつことが予測される。日置部の職掌は内廷での殿舎の管理を中心とし、大和では葛城に拠点があるとされ、一方で出雲西部に濃く分布することから、出雲と大和をつなぐ役割を果たしていたことが指摘されている(吉松2016)。そして、その分布について検討した今津勝紀は大和国葛上郡・丹波国多紀郡・丹後国与謝郡・但馬国気多郡・因幡国気多郡・出雲国神門郡・周防国佐波郡・長門国大津郡に日置郷があることを示し、「ヤマト・カズラキ・タニハからのイズモへのルートが想定できる」と交通を担っていることを示唆した(今津2023)。郷があるわけではないので、夜久野の日置は取り上げられてはいないが、多紀郡の日置郷と同様の役割があったのではないかと推測する。

この点で注目されるのが、多紀郡日置郷には丹波最大の横穴式石室をもつ洞中1号墳をはじめとする洞中古墳群が存在することである。山陰道からはやや離れるが、交通の要衝に大型横穴式石室が位置する点で、長者森古墳と共通する。交通への供給機能を日置氏・日置部がもっていたことを明瞭に

示しているであろう。多紀郡では、日置氏が大領を務めていることから、郡内の最有力者であったことは疑いなく、洞中古墳群の被葬者も日置氏を考えることが妥当である。この点を踏まえるならば、夜久野の長者森古墳群やそれに後続する後期古墳の被葬者として、大和と出雲をつなぐ交通への供給を目的に配置された日置氏が最有力候補となろう。

この日置氏・日置部と須恵器生産との関係は、直接的には明らかではない。7世紀前半から継続的な生産が見られることから、一氏族の私的な経営を考えることは困難である。須恵器生産そのものが部民制の中で維持されているとみられることから、日置部も含め部民の活動と捉える必要があり、またその拠点としての屯倉の存在も考慮すべきであろう。具体的に須恵器生産に従事した集団が何なのかは今後の文字資料の発見に委ねられるが、交通への供給を目的とした屯倉の設置が継続的な須恵器生産の開始につながったとみておきたい。

4. 鎌谷支群の瓦生産と古代寺院の展開

高内鎌谷遺跡で発見された西灰原では瓦が出土し、鎌谷支群の中で瓦生産がおこなわれていたことが明らかになっている。相伴する須恵器からは8世紀前半に位置づけられるが、瓦の様式からは白鳳期と評価できる。この段階の瓦はほとんどが寺院に供給されたと考えられることから、この鎌谷支群の瓦生産も寺院で使用する目的であったと想定してよい。また、隣接する氷上郡市島町の三ツ塚廃寺の瓦生産が寺院近傍の天神山瓦窯跡やその東にある須恵器生産地である鴨庄窯跡群でおこなわれていたことが示すように、寺院近傍の瓦生産が基本であったと推測される。したがって高内を中心に中夜久野地区に寺院が存在した可能性が高いと判断する。

この鎌谷支群から供給された寺院は、その年代から判断して、平地に営まれた寺院であることは確実視できる。一方、中夜久野地区では山寺の成立も古代に遡ることが想定できる。中夜久野地区の文化財の中では、大油子の大山の山中にあった旧大日寺の観音菩薩立像が10世紀の制作と推定され、この地にあった山寺、大日寺の年代を示している可能性がある。今日では観音堂をとどめるのみであるが、もともとは多くの建物をもつ山寺であったと考えられる。古代の山寺は、平地寺院との関係で山林修行の場として成立することが知られており、この山寺のもとになった平地寺院を鎌谷支群の供給先の寺院とみることも可能である。この寺院が未発見である状況では、憶測を慎まねばならないが、旧大日寺の仏像の年代である10世紀には、夜久野末窯跡群の生産が復活しており、何らかの関係があったと推測することも不可能でない。

5. 丹波地域の中の夜久野末窯跡群

夜久野末窯跡群で生産された須恵器の特徴については、すでいくつか言及があり、一定程度の位置づけを得てきている。まず、杯や皿の口縁内側を凹ませる、あるいは沈線を入れる須恵器が8世紀前半から現れ、丹波地域もしくは近畿地方西北部で広く共有される特徴であることから、「丹波系須恵器」と呼称されている（稲本2023）。夜久野末窯跡群の須恵器でもこの特徴は捉えられるが、そ

れが明瞭になるのは8世紀中葉で、他の窯からはやや遅れる可能性がある。これは稜椀の出現の遅れとも対応していると考えられるが、時間差をもちながら他地域と同調していると評価できるだろう。

また、重ね焼きについては、稲本悠一氏がとりあげた丹波の諸窯の中で、鴨庄窯跡群と夜久野末窯跡群が共通する傾向をもち、他の窯とは異なることが明らかになっている。このように、丹波の範疇で捉えられる要素と、より近接する窯群どうしでみられる特徴がある。また、他の窯跡でしばしば見られる大型の供膳具が夜久野末窯跡群ではほとんどないことも違いの一つとして把握できる。採集資料のために生産器種の検討には困難が残るが、壺類の少なさとともにこの窯跡群の個性となる。

夜久野末窯跡群の供給先については古くから検討課題となってきた。旧夜久野町域では大油子にある荒堀遺跡では奈良時代の須恵器が出土していて、形態や胎土から夜久野末窯跡群の製品であることが確認できた（菱田2013）。一方、夜久野から離れると夜久野末産の須恵器と想定できる資料があまりなく、同じ天田郡の中心域の遺跡でも見出すことが難しい。夜久野末窯跡群の基数から考えると広域への供給も十分に考えられるが、現状ではこの課題についても将来へ持ち越しになっている。

この窯跡群の消長では、8世紀末に急速に生産が縮小し、牧川南岸の東地区に窯跡が限られることも重要である。こうした時期に大きな社会変化がおこったことを暗示しており、同じ丹波でも鴨庄窯跡群は、夜久野末窯跡群よりも継続するが、9世紀に入ると衰退傾向にある点では変わりはない。こうした生産の変化は需要の変化に対応していると考えられ、都という供給先を確保した篠窯跡群を除くと、丹波地域や丹後地域の生産地は一様に衰退するとあると言えそうである。一方、夜久野末窯跡群では9世紀末に生産が復活する状況がうかがえた。今回の調査では、大町田支群で、以前から知られていた回転糸切りの底部をもつ椀を生産する窯のほかに、ヘラ切りの底部をもつ椀を生産する窯を発見できた。こうした技法変化が同じ生産地の中で起こっていることが示され、技術の受容過程を明らかにする上でも重要な知見になる。こうした平底の椀は播磨から丹後にかけて広く普及しているが、そうした技術の伝達の中に夜久野を位置づけることが可能である。

6. 夜久野末窯跡群の環境史

さて、夜久野末窯跡群の調査では、自然科学の諸分野との協業を重視し、とりわけ環境史との接続をはかってきた。具体的には、現生の植生の分析やボーリング調査による花粉



図2 丹波国内の須恵器窯跡

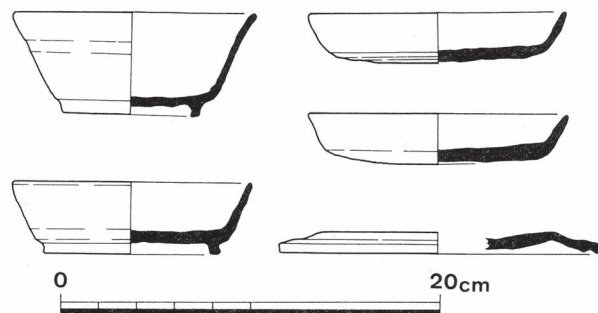


図3 荒堀遺跡出土の須恵器

分析、そして採集した炭化材の樹種同定や放射性炭素による年代測定、また地質についても露頭の観察のほか、須恵器の胎土の調査もおこない、材料となった粘土の検討をおこなっている。

地質の調査からは、牧川北岸と南岸で大きく異なり、北岸が堆積岩が中心であるのに対し、南岸でははんれい岩が風化した粘土が基盤となっており、そのため窯を築きやすいゆるやかな傾斜の丘陵が形成されていることが判明した。この地質の違いが出土須恵器の胎土に含まれる鉱物にもあらわれており、南岸でははんれい岩に由来する鉱物が顕著であるのに対し、北岸では認められないという違いが明らかになって。これは、須恵器の材料となる粘土をそれぞれの場所で確保したことを示しており、地区ごとに工房・作業場があったことが導かれる。胎土の観察例を増やすことにより、地区ごとの違いを緻密に検討することが可能になると考えられる。

花粉分析と炭化材の樹種同定の調査は、ともに矛盾しない結果が得られている。夜久野末窯跡群の稼働時期では、アカマツやコナラなど薪炭材に適した樹種の多い、燃料材を採取しやすい植生環境であったことが明らかになっており、実際に得られている炭化材も同様の傾向を示している。一方、マツも増加傾向にあることが示されているが、窯の操業による燃料材の取得によるのか、水田開発、あるいは薪炭の採取によるのかは、さらに検討が必要である。炭化材について有意な結果が得られているが、資料を増やすことが課題となっている。地区ごとの違いも明らかになる期待があり、広範囲に及ぶ須恵器窯跡群をフィールドに、時間軸と空間軸で環境を検討できる可能性を秘めている。

繰り返しになるが、夜久野末窯跡群については、その範囲や基数、そして時期がほぼ明らかになり、140基の窯跡が存在したと推測できたことから、丹波地域屈指の生産地であることが確実になった。総数が100基を越えるのは丹波国内では亀岡市の篠窯跡群ぐらいであり、とくに奈良時代に限れば丹波最大の生産地であることは疑いない。そして、古代からの地形の改変が少なく窯跡の多くが現地に残されていることも重要な価値と言えるだろう。地質や須恵器胎土、あるいは花粉分析や炭化材の樹種の同定といった自然科学の方法によるアプローチについても、これまで荒らされることなく保全されてきた窯跡群であることが最も有利に働いている。今後の調査によっては、窯業生産という人の活動と環境史とを結び合わせて、人と自然の関係を考察するための成果を生み出すことができると考える。手つかずで古代の窯跡がそのまま現代に伝えられているというこの遺跡の本質的価値の重要性について改めて強調しておきたい。

(菱田)

引用文献

東 昭吾 2018 『末古窯跡群詳細調査報告書（1）—末古窯跡群詳細分布調査報告』

稲本悠一 2023 「奈良時代の地方における須恵器生産の展開—丹波国と周辺の諸窯を事例として—」『洛北史学』第25号

今津勝紀 2023 「キビ・イズモ・ヤマト」『古代出雲と吉備の交流』島根県古代文化センター研究論集 第30集

菱田哲郎 2013 「末窯跡群と飛鳥・奈良時代の夜久野」『夜久野町史』第四巻（通史編）福知山市

吉松大志 2016 「日置氏と欽明朝の出雲」『出雲古代史研究』26

表1 採集土器一覧(1)

No.	窯	報告番号	器種	残存率	備考
1	KT04	3	壺(体部)	10%以下	肩部上方に1条沈線 沈線上方に波状文 数カ所に焼膨れ
2	KT04	4	平瓦	—	凹面に布目痕
3	KT06	5	蓋	15%	つまみに融着物あり
4	KT06	6	蓋	10%	
5	SG01・02	1	蓋	65%	重ね焼きで口縁部外面のみ降灰 焼歪み
6	SG03	11	皿A	60%	
7	SG03	12	皿A	60%	背置焼成 外面に降灰
8	SG06	16	蓋	10%	正置焼成 外面に降灰
9	SG06	17	蓋	40%	天井部外面に自然釉、内面降灰 重ね焼き痕あり
10	SG07	23	蓋	10%以下	厚さ1.0~1.2cmの破片融着
11	SG07	24	杯H	10%以下	倒置
12	HK03	3	壺(底部)	10%以下	
13	OM01	1	椀	10%以下	高台にヘラの差し込み痕 底部糸切り
14	OM01	2	椀	10%以下	底部糸切り
15	OM02	6	椀	40%	口縁部焼歪み 高台外面回転削り出し 底部糸切り
16	OM02	7	椀	30%	口縁部にヒビ割れ割れ 高台外面回転削り出し 底部回転糸切り
17	OM06	11	椀	40%	高台外面回転削り出し 底部回転ヘラ切り ヘラ切りの上部に直線上の段あり 軟質
18	OM06	12	椀	40%	暗褐色状の付着物や黒斑が内 外面に付着
19	TU04	1	蓋	20%	2片が接合
20	TU04	2	蓋	12%	軟質
21	TU04	4	壺(肩)	10%以下	頸部風船技法による閉塞
22	TU04	5	水瓶	10%以下	頸部風船技法による閉塞 肩部下方にカキ目
23	TU04	6	甕(口縁)	10%以下	突帯下方に波状文
24	TU04	7	甕	10%以下	突帯上部に自然釉
25	TU04	8	甕	10%以下	突帯下方に波状文
26	TU09	10	蓋	40%	重ね焼き痕有り 軟質
27	TU09	13	杯B	25%	
28	TU09	14	甕(口縁)	10%以下	土師器 頸部内面にケズリ
29	TU散布地	15	平瓶	20%以下	高台に須恵器片融着
30	T005	2	杯A	15%	背置焼成
31	T005	3	杯B	15%	
32	T005	4	杯B	65%	沢からの採集のため磨滅が激しい
33	T005	5	杯B	15%	高台の貼付けが不十分で一部歪む
34	T006	10	皿A	10%	
35	T007	13	杯B	12%	外に向けて開くように歪み 高台の貼付け不十分
36	T007	14	皿B	15%	
37	T007	15	稜椀	10%以下	口縁部歪み
38	T007	16	甕(口縁)	10%以下	
39	T009	1	蓋	45%	
40	T009	2	蓋	—	内面に焼膨れ
41	T009	3	蓋	10%以下	外面の色調の違いは重ね焼きに よるものか
42	T009	4	蓋	25%	つまみ欠損
43	T009	5	蓋	6%	
44	T009	6	杯A	15%	
45	T009	7	杯A	50%	内面底部にヒビ割れ 体部外面降灰

表2 採集土器一覧(2)

46	T009	8	杯B	40%	
47	T009	9	杯B	20%	軟質
48	T009	10	杯B	25%	内面底部、口縁部にヒビ割れ 背置焼成
49	T009	11	杯B	15%	体部外面降灰
50	T009	12	杯B	30%	
51	T009	13	杯B	12%	背置焼成 体部内面底部付近に1条沈線
52	T009	14	皿A	60%	軟質
53	T009	15	皿A	65%	口縁部一部に降灰
54	T009	16	皿A	15%	口縁部外面に降灰 内面口縁部付近に凹みがめぐる
55	T009	17	皿A	25%	生焼け
56	T009	18	皿A	15%	
57	T009	19	皿B	25%	内面口縁部付近に凹みがめぐる 外面外面降灰 背置焼成 窯道具転用品
58	T009	20	皿B	10%以下	口縁部歪み 外面降灰 背置焼成
59	T009	21	皿B	15%	内面口縁部付近に1条沈線 正置焼成
60	T009	22	皿B	15%	内面口縁部付近に1条沈線
61	T009	23	皿B	8%	内面口縁部付近に1条沈線 焼歪み
62	T009	24	皿B	12%	高台の貼付け不十分
63	T009	25	稜椀	15%	口縁部内面に1条沈線 体部外面にヒビ割れ
64	T009	26	椀	10%以下	体部外面に降灰
65	T010	27	皿B	15%	内面口縁部付近に1条沈線 背置焼成
66	T013	2	蓋	30%	内面に降灰
67	T013	3	蓋	10%以下	天井部破損箇所多数あり
68	T013	5	杯B	30%	高台貼付け雑
69	T013	6	皿B	25%	体部短い
70	T017	10	蓋	25%	口縁端部のつまみ出しが弱い 正置焼成 口縁部外面に重ね焼きの際のバリ付着
71	T017	11	蓋	30%	環状つまみ 軟質
72	T017	12	杯B	15%	
73	T017	13	稜椀	10%以下	稜部に1条沈線 軟質
74	T017	14	稜椀	15%	稜部に1条沈線 内面口縁部付近に1条沈線 軟質
75	T017	15	鉢(底部)	10%以下	底部へラ切り
76	T017	16	壺(体部)	10%以下	肩部に2条の薄い沈線
77	T017	17	壺(底部)	10%以下	細く短い高台
78	T030	18	蓋	40%	
79	T030	19	蓋	25%	環状つまみ
80	T030	21	杯B	25%	高台端部に1条沈線
81	T030	24	皿A	15%	口縁部に焼歪み
82	T031	2	蓋	10%以下	
83	T031	4	皿A	50%	蓋の可能性あり
84	T031	5	皿B	25%	内面口縁部付近に1条沈線 高台端部に1条沈線
85	T031	6	皿B	20%	内面口縁部付近に1条沈線
86	T033	8	皿蓋	25%	口縁部焼歪み
87	T033	9	杯B	50%	体部焼歪み
88	T033	10	皿A	50%	
89	T034	11	皿A	20%	体部と底部の接合部に溝
90	T034	12	稜椀	15%	
91	T034	13	稜椀	45%	口縁部にヒビ割れ 底部外面に環状の爪形状圧痕
92	T035	14	杯A	25%	

表3 採集土器一覽(3)

93	T036	15	杯蓋B	20%	口縁部に焼歪み・ヒビ割れ 正置焼成 天井部に重ね焼きの際のバリ付着
94	S007	1	蓋	25%	
95	S007	2	蓋	80%	環状つまみ 外面多量の融着物
96	S007	3	蓋	20%	
97	S007	4	蓋	15%	環状つまみ
98	S007	5	蓋	10%以下	
99	S007	7	杯B	20%	
100	S007	8	杯B	40%	
101	S007	9	皿A	25%	
102	S007	10	皿B	45%	内面口縁部付近に1条沈線 高台端部に1条沈線 高台内面に爪形状圧痕
103	S007	11	皿B	50%	内面口縁部付近に1条沈線
104	S007	12	稜椀	15%	内面口縁部付近に1条沈線
105	S007	13	稜椀	15%	
106	S007	14	稜椀	15%	内面口縁部付近に1条沈線 稜部に1条沈線
107	S007	15	稜椀	15%	
108	S007	16	壺(底部付近)	10%以下	
109	S007	18	壺底部	10%以下	
110	S009	25	蓋	10%以下	
111	S009	26	蓋	25%	
112	S009	27	蓋	25%	口縁部外面に重ね焼き痕
113	S009	29	杯A		
114	S012	1	杯B	50%	
115	S012	2	杯or皿B(底部)	10%以下	
116	S012	3	壺(体部)	10%以下	
117	S013	4	蓋	30%	
118	S013	5	皿A	20%	内面に小石付着
119	S013	6	皿B	10%	内面口縁部付近に1条沈線
120	S013	7	皿B	20%	内面口縁部付近に1条沈線 口縁部焼歪み
121	S014	8	蓋	10%以下	天井部一部破損
122	S014	10	杯A	50%	内外面降灰
123	S014	11	稜椀	10%以下	内面口縁部付近に1条沈線
124	S014	12	壺(体部)	10%以下	
125	S014	13	壺(底部)	10%以下	底部内面に「×」の線刻 底部数カ所に焼膨れ
126	S014	14	甕(口縁)	10%以下	
127	S014	15	甕(大甕口縁部)	10%以下	
128	S014	16	甕	10%以下	頸部から肩部にかけて破損個所多数
129	S017	17	壺	10%以下	風船技法による閉塞
130	S018	21	杯B	25%	高台端部に1条沈線
131	S018	24	皿B	30%	口縁端部・高台端部に1条沈線
132	S018	26	甕(口縁)	10%以下	
133	HN06	28	杯or皿A	16%	半径6.1cm地点で径を復元
134	HN07	29	蓋	25%	
135	HN07	30	壺	16%	内面に左斜め上方向にナデ上げた痕が残る
136	HN07	31	甕(肩)	10%以下	外面格子上タタキ 内面同心円状当て具痕 頸部の剥離痕が残る
137	HR02	1	蓋	10%以下	重ね焼き痕あり
138	HR02	2	蓋	10%以下	全体的に焼膨れ
139	HR02	3	杯B	90%	高台端部に強いナデによる凹みがめぐる 口縁部にヒビ割れ 背置焼成
140	HR02	5	皿B	10%以下	内面口縁部付近に強いナデによる凹みがめぐる 高台端部に1条沈線
141	HR02	6	稜椀	10%以下	外面に降灰
142	HR02	7	壺(底部)	10%以下	
143	HR02	8	壺(体部)	10%以下	肩部に3条沈線
144	HS07		蓋	10%以下	軟質

表4 採集土器一覧(4)

145	HT03	1	蓋	15%	
146	HT03	2	蓋	15%	外面に降灰
147	HT03	3	蓋	25%	外面口縁部付近に重ね焼き痕
148	HT03	4	蓋	20%	
149	HT03	5	杯A	25%	
150	HT03	6	杯A	20%	口縁部に降灰
151	HT03	8	杯	15%	軟質
152	HT03	9	皿B	25%	
153	HT03	10	壺(体部)	10%以下	耳部に穿孔 耳部上方に2条沈線
154	HT03	11	壺(体部)	10%以下	
155	HT03	12	甕	10%以下	軟質
156	HT04	6	杯B	15%	体部外面に降灰
157	HT04	7	皿A	25%	正置焼成
158	HT04	8	皿A	25%	正置焼成
159	HT04	9	皿B	25%	高台端部に強いナデによる凹みがめぐる
160	HT04	10	稜椀	15%	高台端部に強いナデによる凹みがめぐる 内面にヒビ割れ
161	HT04	11	壺(体部)	10%以下	肩部に2条沈線 内面にヒビ割れ
162	HT04	12	壺	10%以下	
163	HT09	1	杯B	10%以下	底部外面に爪形状圧痕
164	HT10	5	杯A	15%	
165	HT10	6	皿A	25%	体部焼歪み
166	HT15	7	蓋	30%	軟質
167	HT15	8	杯B	25%	高台端部に強いナデによる凹みがめぐる 体部外面に降灰
168	HT15	9	杯B	35%	高台端部に強いナデによる凹みがめぐる
169	HT15	10	皿A	10%以下	軟質
170	HT15	11	皿A	35%	軟質
171	HT15	12	壺(口縁)	10%以下	口縁部側面に薄い4条沈線 風船技法による閉塞
172	NG01	9	杯	10%	重ね焼き痕あり
173	NG04	15	杯B	25%	高台端部に1条沈線
174	NG04	16	皿A	45%	正置焼成 底部に窯壁付着
175	NG04	17	皿A	15%	内面口縁部付近に強いナデによる凹みがめぐる 体部にヒビ割れ 背置焼成
176	NG07	21	杯A	15%	体部外面に強いナデによる凹みがめぐる
177	NG07	22	皿A	25%	口縁部外面に降灰 内面底部に須恵器片が融着
178	NG08	24	蓋	40%	外面口縁部付近に自然釉、重ね焼きの際のバリ付着
179	NG08	26	杯B	20%	高台端部に強いナデによる凹みがめぐる
180	NG08	27	皿A	20%	
181	NG08	28	皿A	25%	
182	NG08	29	皿B	40%	高台端部に強いナデによる凹みがめぐる 口縁部にヒビ割れ
183	NG08	30	皿B	90%	外面に降灰 体部外面に須恵器片が融着
184	NG08	31	稜椀	15%	内面にヒビ割れ
185	YM01	2	杯B	20%	
186	YM01	3	壺(底部)	10%以下	体部に小石付着
187	YM01	5	甕(頸部)	10%以下	体部外面に平行文タタキ 体部内面に同心円状の当て具痕

※表の作成は井川瑞季が担当した。

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。(も)

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

(以上、菱田撮影)

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

(栗山雅夫氏撮影)



京都府立大学文化遺産叢書 第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編集 菱田 哲郎 (京都府立大学文学部教授)
諫早 直人 (京都府立大学文学部准教授)
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2